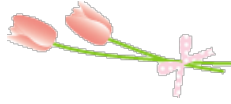




# 阪神カウンセリング・ラボ ニュースレター

2024 4月号



## 心理療法（5） 心理療法の軸、クライアントさんが中心

病院に勤務していた30数年前の話です。

病院では、患者さんからカウンセリングの希望がある場合に、医師から許可がおりて、カウンセリングが実施されます。そのため、患者さんが継続を望まれている場合だけ、連続したカウンセリングができましたが、ほとんどは、次に結びつかないことが多かった記憶があります。

当時の精神科病院は、どこでも閉鎖病棟でした。そういう状況でないと、患者さんの管理が難しい状態だったと思います。私が勤務した病院は、その状況を改善していくために、閉鎖病棟を少なくして開放的になるようにし、その地域では先進的な方向性を持った病院でした。それでも、患者さんの状態はけっこう厳しい様子で、治療の先頭に立つ医師も、患者さん個々に対応する姿は少ないものでした。

私は、医療にかかわる職業とは異なるところから転職しましたので、精神科の患者さんとはいえ、人間同士のかかわりですから、時間があれば、病室を回って、患者さんとかかわりをもつことを大切にしていました。しかしその当時、ほとんどの医師は、詰め所で問診して、病室に行くようなことはありませんでした。私はこの傾向を不思議に思い、ある医師に、「どうして患者さんの部屋に行かないのですか」と質問したことがあります。その医師は、「怖いから」と率直に話してくれました。確かにそういう側面はあります。ある時、女性病棟の詰め所に入った途端、新入院患者さんが私の方に詰め寄り、当時は着用していた私のネクタイをつかみました。ネクタイをつかまれると、離しようがなく、周りの皆さんが押さえてくれて助かりました。そのような状況下の病院でカウンセリングを行うことには危険もありうることを承知した上で、個室でカウンセリングをおこなっていました。

次号につづく…

<病棟に戻ると暴れて保護室に隔離されるような患者さんが、カウンセリングで改善した症例>

阪神カウンセリング・ラボ 梅田相談室

<https://www.hanshin-cl.com/>

〒530-0014 大阪市北区鶴野町4-11 朝日プラザ梅田9階910

Tel/Fax 06-6147-2533

E-mail [hanshin-cl@star.ocn.ne.jp](mailto:hanshin-cl@star.ocn.ne.jp)

